

As-Dur（左手下行、Cで開始）などがある。ほとんどの場合、左右の手は異なった調性で練習することになるが、C-durに限り、右手上行Cで開始、左手下行Eで開始すれば、同じ調性（C-Dur）での訓練が可能である（左手のこの指使いは通常では使用しないが、練習としては有効である）。

5. 音階が鍵盤の内側に向かう（右手では下行、左手では上行）練習では【第2～4指が親指を越える動き】が入るが、この音階進行では「外転」で多少広がっている腕を元に戻すために「内転」の動きが起こる。この時、肘も一緒に体幹に近づける。4本の指が親指を越える時は、指の動きだけで進行させず、腕の「回内」が伴うが、親指を越える瞬間に急に回内を実行するのではなく、動きはわずかずつ、徐々に準備されていなければならない。腕の筋肉を弛緩させて重力を感じながら、自然な位置に腕を戻すことができれば、それ以上のテクニク的な困難はない。
6. 音階練習での注意点は【親指の潜り】と【4本の指が親指を越える動き】の問題以外は、【5指（5音）での練習】の場合と同様である。最初は非常にゆっくりとしたテンポで腕や手の動き、角度、必要な筋肉の緊張と弛緩をコントロールしながら練習を行い、その後、速いテンポで試みる。♩ = 120くらいから始め、次第にテンポを上げて作品中に求められる最速のテンポ、最大約♩ = 160までを、同様の方法で丁寧に練習する。練習は、まずテンポを半分に落として動きを確認し、譜例に示したように、短い休みを挟んで腕を完全に弛緩させた後、次に課題として設定したテンポで試みる、という方法で行うとよい。音にむらがなく、淀みなく進行しているかどうかには耳を澄ますのは言うまでもない。

R. H. ♩ = 120 - 160